
Parent-Teacher Association

尾登遙香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Parent - Teacher Association

【Zコード】

N4014P

【作者名】

尾登遙香

【あらすじ】

あたしはこの物語の当事者ではない みんなの知ってる物語は偽物なんだ

小学6年生の中野紗樹は、卒業式を目前に控えたある日、今年一年を振り返る。あのPTA会長が去った今、学校には静寂が訪れる。あの会長は本当に悪者だったのか？

「Parent - Teacher Association」、「

PTA」を子供の目線から見た物語。

PTAが主題ですが、学校行事などもたくさん書いていきたいと思

つ
て
い
ま
す。

プロローグ ～再び春を迎えて～（前書き）

「モンスター・ペアレント才前のP-TA会長の娘といつのはどんな気分なんだろう？」

そんなことを考えながら書き始めました。

物語の大筋は見通しがついていますが、細かいところはその時の思いつきでやろうと思います。

作者の実体験に基いているわけではないので、少々非現実的なところもあるかもしれません……。

プロローグ ～再び春を迎えて～

渋谷の地下ホームから西へ行く急行電車に乗ると、約30分で終点に着く。上空から電車を追っていくと、終点の駅の周りには、碁盤目状にマンションが立ち並んで、その向こうに一戸建て住宅が並んでいるのが見える。

もえぎ野二ニュータウン

高齢化が叫ばれる近年も、着実に人口を増やし続けている二ニュー タウンだ。以前は駅の西側のみが開発されていて、一步東へいくとそこは荒れた雑木林であつたが、25年前にそこも開発され、雑木林の一部は公園として整備されて現在に至る。

東側の開発にあたつて、小学校を増設した。昭和40年代にもえぎ野が開発された時には小学校は1校。もえぎ野小学校（今のもえぎ野西小学校）だけであった。その後昭和50年にもえぎ野北ともえぎ野南が開校。そして昭和60年、もえぎ野東小学校が開校したのだ。最も新しい東小学校は今年、創立25年を迎えた。

思えばこの一年、色々あつた。「思い出」と言えば聞こえがいいけど、大人になつて同窓会で盛り上がることのできる話題ではない。あたしも一連の事件で、一時期はものすごく心に負担を感じた。いまでもその傷跡は残つている。

でも、事件が終息して、少し心が軽くなり、冷静になつてみると、これもあたしの人生の中での重要な経験だつたのかな？と思つてきたりもする。

あたしは当事者ではなかつた。と、思つてゐる。自分では。たぶん本当にかかわりのなかつた人に言わせてみると、あの事件であたしは重要な地位を占めていたといつてもたくさんいるだろう。でも、本当は違うんだ。みんなの知つてゐる物語は、偽物なんだ。本当の真相は、こうなんだ。

あの物語が始まったのは、去年の 4月。その頃はまだみんな物語、いや事件の始まりには気づいていなかった

桜は散り、茶色くくすんだ花びらがコンクリートの中庭に吹き溜りになつて、無残な姿をさらしていた。

1号棟の1階の一番端にある半分倉庫のよつた薄暗い部屋、そこがこの学校のPTA会議室だ。

このもえぎ野東小学校のPTAでは、毎年6回広報紙を発行することになっている。

今日も、今年度第1号を製作するPTA広報委員が集まつて、話し合いを進めていた。

第1号の担当は6年生に子供をもつ広報委員だ。それから第2号が5年生、第3号が4年生……と、一通り、一般に経験の少ない（兄弟姉妹の関係で経験者もいるが）1年生の親が最後になるようにしてある。

「この、『年6回』というのは、いつ誰が決めたのかは知らないが、もう少し減らしてもいいのではないかという意見もある。ただしそれが会議で声高に叫ばれることは無く、母親たちの雑談の中など生まれている。

今年のPTA会長には、6年3組の神原葉月の母親、弥生が就任した。

神原葉月は、あたしと同じクラスの女子だ。

神原家には、2人の子供がいる。葉月は妹で、睦哉という兄がいる。2人は6才差である。ということは、兄の睦哉が小学校を卒業するとい、その次の月から妹の葉月が入学してくるということになる。つまりどういうことか？ 弥生は、12年間連續でPTAに関することになる。ということは、12年間連續で役員を務めることもできる。

そして 12年間連續で会長を務めることもできるのだ。

そう、神原弥生は、学校創立以来、初めて12年連續で会長を務

めた人間なのだ。

そもそも、もえぎ野東小学校は今年やつと創立25周年を迎える。歴史としては浅い。しかし、12年連続というのは空前絶後と言つていいのではないだろうか。

この神原弥生というのがなかなかの曲者なのだ。もちろん、会長は毎年自ら立候補しているわけだから、仕事には人一倍責任をもつてやつている。だが、それが高じてなのか、彼女の性格が影響してなのか、彼女は、職員室を牛耳つているのである。校長や教頭も、弥生にだけはかなわない。学校に少しでも落ち度があれば、校長室に乗り込んで重箱の隅をつつくように追及し、2時間、3時間と校長と面談することばかりにある。

低学年の児童の中には、彼女を教師だと思い込んでいる者もいる。それほど学校への出没率が高いのだ。

一度、意を決して弥生に強く反発した校長がいる。その年に晴れて校長に就任したという話だ。それは、あたしや葉月が入学する前である。

で、どうなったか。校長は年度末に辞表を提出し、学校を去つたところ……

モンスター・ペアレントと云いたいところだが、弥生にはPTAを背負つっているという大義名分があるわけだから、むやみに悪者扱いするわけにもいかない。だから学校としては扱いに困つているのだ。それ以来、弥生は学校の主として偉ぶつて、云いたいこと云つて、役員をこき使つて……他方から恨まれているわけだ。

しかし誰も反発できない。ここいらで救世主が現れてもいいような気もするが、そんな気配は全くない。

あたしは今年、初めて神原葉月と同じクラスになった。PTAのこととは色々と聞いていたし、そのせいで葉月がなんとなくみんなか

ら避けられていることも知っていた。別にいじめとかそういうた深刻なものには見えなかつたし、葉月が割と陰気な性格なのも、人が寄り付かない原因の一つじゃないかと思っていたから、特に気には留めていなかつた。

5月に入つて、クラスでは春の遠足の準備に取り掛かつた。

この学校は、教育方針がそのなか知らないが、4年生以上の遠足には、必ず班の自由行動が重要視されていて、6年生の春の遠足は、秋に控える修学旅行の予行練習のようなものなので、特に力が入れられている（もちろん、修学旅行でも自由行動の時間がが多くなっている）。

もえぎ野東小学校6年春の遠足の行先は、東京である。もちろん日帰りだが、注目すべきは行きも帰りも班ごとに電車で移動するといつことだ。

遠足では、男女2人ずつ、4人で班を組み、もえぎ野駅からそれぞれ指定された電車に乗り込む。これができるのも、もえぎ野と渋谷を結ぶ西南急行電鉄（略して西急）の林間都市線が、渋谷から地下鉄に乗り入れ、浅草の先の押上まで乗り換えなしで行けるからだ。押上で電車を降りると、一団は学校で手配した観光バスに乗る。こじでやつと一般的な遠足の風景となるわけだ。

途中で浅草寺を見た後、上野公園で少し早めの昼食をとり、バスは霞が関へ向かう。

国会議事堂で降ろされで、ここには先生の引率により全員で見学となる。

議事堂の見学が終わると、再び自由行動になる。といつてもそれほど時間がないから、大体の班は日比谷公園か皇居外苑をうろついている。

そして今度は永田町駅に集合し、直通電車でもえぎ野に帰るのだ。小学校の遠足としてはかなりハードだと思つ。しかし毎年みんな無事に帰つてきているので、特に文句も出ず、今年もそのルートで決まった。

神原弥生はなにかケチをつけるかもしないと思ったが、そんな

様子は見られなかつた。

あたしは知らない間に神原葉月と同じ班になつていた。他の男子2人は、今まで仲良くしていた人だったので、「葉月を取り残さないようにな」と思った。

あたしは今まで一度だけ葉月と話したことがある。あれは2年生の時だつたと思う。葉月が怪我が何かをして、母親が学校に来たのだ。よく覚えていないということは、大した怪我ではなかつたんだろう。それでもその日の放課後、弥生は現れたのだ。

校長室の外で、葉月はじつと待つていた。キーキーうるさい母親と一緒に校長室に入るのは恥ずかしいと思つたそうだ。あたしはたまたま荷物の整理に手間取つて帰りが遅くなつてしまい、校長室の前を通りかかつた時なんとなく声をかけてみたら、そんなことを話してくれた。その時すでに、あたしはPTA会長の顔は知つていたが、葉月の母親だということは分からなかつた。

結局話をしたのはその時きりで、今、何かの縁で同じ班になつたのだ。

あたしたちは、初めに往路の電車を決めにかかつた。学校からは5本の電車が指定されていて、そのどれかに乗らなければいけない。かといって、特定の電車のに混雑が集中しても困るので、規定の班数に達したら、代表者によるじやんけんとなる。

どの電車に乗つても結局は同時に発車するバスの乗るのだから、早いのにしても得は無いと思い、最後の電車を希望した。ところがみんな考へることは同じなようで、じやんけんとなつた。班の男子の一人、御波倅みなみねきや也が挑んだが負けてしまい、あたしたちは最初の電車、もえぎ野8時10分発の準急・押上行きに乗ることになつた。

「じゃあ、駅に8時集合ということだ。

班長のあたしが締めて、最初の話し合ひは終わつた。
休み時間になり、葉月が寄つてきた。

「あの、紗樹ちゃん、遠足の時はお母さんが何も言わないよつじておつから……。」

「そうか、それを心配していたのか。そつじえば、「紗樹ちゃん」って呼ばれたの久しぶりだな……。」

「うん。時に何も起こらなければ、何にも言つてこないでしょ。」

「たぶんね」

葉月は短く言つて俯いて続けた。

「本当に、なんにも起こらなければ。」

「そんなに、ヤバいの？」

「もし何かあつたら、また校長室に乗り込むかも知れないから。」
「ああ、確かにあの母親ならやりそうだ。あたしは心の中で苦笑いした。

「万が一、何かあつても絶対に隠し通して下さいー。この通り。」
いきなり手を合わせられたので、あたしはびっくりしてしまった。

「う、うん。あの二人にも言つておく。」

「えつと、それは……。」

「大丈夫だよ。それとなく匂わすだけだから。」
「良かつた……。」

「そんなに不安だつたんかい、あの男子が！」

「あの二人は、あたしと前から仲良いから大丈夫だよ。ちゃんと話も聞いてくれるし。」

「うん……。」

葉月はさつきとは何か別の意味で不安になつたらしく、がっくりと肩を落として自分の席に向かつた。なんなんだ？

おつと、チャイムが鳴つてゐる。次の授業は……図工か。楽な学活の後にこうくるとテンショントン下がるわ……。

あたしの最も嫌いで苦手な教科、図工地獄の45分間の始まり始まり……（大げさか？）。

2 - ? 「紗樹ちやん」（後書き）

西南急行・林間都市線……。

東京と神奈川を結ぶ「あの」路線をモーテルにしています。
分かる人には分かると思いますが。
あなたは分かりますか？

「ちりくしょうー」「ちりくしょうー！」

舌打ちをしながら偉也は運賃箱に着いている読み取り機にバスモをタッチして、駆け足で駅構内に入つて行つた。

「これだったら歩いてきたほうが早かつたじゃねえか！」「自然と独り言が漏れる。

待ちに待つた遠足の今日、4人の中でも家がいちばん駅から離れている偉也は、バスに乗つてもえぎ野駅前のロータリーに滑り込んだ。しかし予期せぬ渋滞に巻き込まれ、到着が10分も遅れてしまったのだ。本当なら8時前に到着する予定だったのに、いまはもう8時8分だ。発車まで2分しかない。

「ヤバい！」

改札の目の前にある西急ストア（西急グループのスーパー）の出入り口の横に、2人の先生と焦りを隠せない他の班員の姿を見つけた。

「おおい、ゴメンゴメン！」

手を振ると、最初に紗樹が気付いて、安心した表情を見せた。

来ない！ 来ない！ 8時をもう7分も回つていて、発車まで3分しかない。ホームからは、

『1番線、地下鉄1-1号線直通の準急・押上行き、あと3分ほどで発車です。しばらくお待ちください。』

と、駅員の肉声放送が聞こえてくる。もう乗つてる人にとっては「しばらく」かもしれないけど、こつちは班員が揃わなくて焦つてんだよ！

「電車は4分おきに出てるんだから、そんなに焦らなくてもいいじゃないの。」

もえぎ野駅チェック担当の1組の平木先生が、いかにもオバサンくさい発言をする。

「計画通りにいかないのは、どうしても気にくわないんです！」
あたしは眉間にしわを寄せて噛みついた。

林間都市線は、首都圏でも有数の混雑路線である。そのため朝夕の列車本数は多い。もえぎ野駅には1本のホームがあつて、それを挟むように線路が敷いてある。終着駅だから、1番線と2番線はどちらも渋谷方面行きになつていて。

さつき2番線から各駅停車が出たと思つたら、もう次の電車が入つてくるところだった。

ああ！ そうこうしてゐる間に8時8分になつてゐる。発車まであと2分だ！ 目の前には改札があり、その向こうは直接ホームにつながつてゐる。走れば30秒もかからない。偉也はバスで来ると言つていた。

ロータリーのほうを見る。人が多いのでよく見えないが、赤い帯を巻いたバスがひつきりなしに入つてきているというのは分かる。

ふいと改札のほうを振り向くと、手を振つてゐる偉也の姿が

「おおい、ゴメンゴメン！」

やつと眉間から皺が消えた。このまま皺を寄せたままだつたら、太宰治の『走れメロス』に出てくる王様みたいな顔になつちゃうところだつた。あ、分かる？ 暴君ティオニス。

あたしはさつと平木先生のほうに向きなおり、

「6年3組5班、班員全員集合しました！」

と宣誓した。

「はいはい、じゃあチェックど。」

平木先生はのんびりとした手つきであたしの遠足のしおりにはんこを押した。あたしはそれをさつと奪い取り、他の3人の先頭に立て改札に飛び込んだ。

あたしは華麗な手つき（？！）でバスモをタッチし、改札を抜けた。葉月は普通の切符を買ってあつた。ちょっと手間取つてゐる感じ。もつとどんなのがちょっと影の薄い佐島だ。なぜだか私と腐れ縁で、1年生の時からずっと同じクラスなのだ。

ここに、追いつめられたるものすごい能力を發揮する。頭の働きといい、動きの素早さといい……。まだ普段通りといふことは、今はそれほど追いつめられている状況ではないようだ。

「急行」

一応3人を急かして、ホームを走った。一番後ろの車両に乗ると押上で降りる時に階段が遠くなるから、真ん中の5号車に乗ることにした。空席はもうない。それどころか、吊革も半分くらいが埋まっている。

『お待たせいたしました。1番線から、地下鉄11号線直通、準急・押上行きが、発車いたします。駆け込み乗車は危険です。次の電車を』利用ください。『ドアが閉まります。ご注意ください。』

朝の忙しい時間帯でも、のんびりとした口調の自動放送は流れる。

『駆け込み乗車は危険です。』とか言つて、こののんびりした放送が駆けこみ乗車を助長する気がするんだけど……。『問答無用、ドア閉めます!』って言つて閉めちゃえればいいのに。まああたしたちが間に合つてよかつた。

そういうえば、この電車に乗る予定になつてゐる他の班は見当たらぬ。もつと早く来て、前のほうの車両の座席を確保しているのだろう。

『1番線の準急・押上行き、ドアを閉めます。駆け込み乗車はおやめください。はい、ドア閉めます。次の電車を』利用ください。『1番線準急電車、ドア閉めます。』

今度は駅員の声で放送が入つて、やつとドアが閉まつた。と思つたらまた開いて、閉まつた。たぶんどこかのドアで駆け込み乗車があつたのだろう。駅員がさんざん言つてゐるのに。どうしてこう大人つて勝手なんだろうねえ……。あと5分早く起きれば余裕で乗れるのに。ん? その5分がきついんだつて? はいはい、言い訳は聞きたくありません。

2 - ? 駆け込み乗車はおやめください。（後書き）

バスモは「存知の方も多い」と思いますが、首都圏以外の方はあまりなじみがないかもしません。鉄道のプリペイド式ICOカード乗車券です。

ちなみに私はSuica派です……。

2 - ?

恋についても見てね（漫書も）

今日は短いです。

2 - ? 恋してゐるやうにも見える

『渋谷、渋谷です。山手線、埼京線、線は、お乗り換えです。』

ドアが開くなりいつぺんに乗客が吐き出され、混雑度が急激に低下した。あたしたちは、4人分まとめて空いた席を見つけて、腰を下ろした。

渋谷でたくさん降りたため、今はほとんどの乗客が席にありついている。

「あーあ、疲れた。」

佐島は足を通路に投げ出した。ピークの時間帯からは外れていたが、混雑はかなりのものだった。

「なんか座席がすごいあつたかいんだけビ。」

「そりやあさつきまで人が座つてたから。」

「なんか気持ち悪い。」

「しようがないだろ。」

話をしているのはあたしと偉也だけで、佐島は半分眠つているし、葉月はなんだか知らないけど一人でそわそわしている。話に入りづらいのかな」と思つて気に掛けてみると、そうでなかつたりする。電車に慣れてないだけかな？

あたしはここで、先生から渡された携帯電話を開いてみた。児童の安全を確保するために、GPS機能付きの携帯電話が各班の班長に渡される。もし何かあつた時に先生や警察・消防にすぐに連絡できるようになつていて。それから少し考えて、試しに事前に知らされていた先生が持つている携帯の番号をプッシュして、受話器を上げたマークがついているボタンを押してみた。耳に当てるといちやんと発信音が聞こえてくる。

『お客様にお願いします。車内での携帯電話のご使用はやばつ！ その放送で我に返り、慌てて通話を切るボタンを押した。』

ところで、あたしは春休みにお父さんにアキバへ付き合わされた。アキバと言つても、「あつち」のアキバではない。つまり早い話、電気街といつことだ。まあ、「あつち」だったらあたしは引くわ。確かあの時は、大手町で4号線に乗り換えて一駅で降り、そのあと少し歩いて、秋葉原にたどり着いたんだつたと思つ。あたしは電気街なんて見てても何も面白くなかった。でもまあ帰りには進級祝いと称してバッグを買つてもらえたからまあいいか。今持つてるのがそのバッグだ。

『大手町、大手町です。4号線、5号線、6号線、9号線は、お乗り換えです。発車します。』注意ください。』

あつという間にドアが閉まつて通り過ぎてしまつたけれど、ついこの前来た駅をまた通るといつのはとても不思議な気持ちになる。

葉月はじつと顔を合わせて下を向いている。

思いつめでいるよつとも見える。緊張しているよつとも見える。恋をしているよつとも見える。いや、あたしとしてはね、葉月はもつと積極的にいけばモテると思つよ。うん。いや、マジで。いやいや、あたしがひがんでるとかそういうふじやなくて、どちらかといつと少しうらやまし……いいわけではないんだけど……。そのね、まあ頑張つてくださいよ。

その後もあたしは偉也と他愛のない会話をして過ごした。雑談というのには不思議なもので、すぐに10分20分経つてしまつ。

『まもなく、押上、押上、終点です。乗り換えのご案内です。1号線はお乗り換えです。本日は、東京サブウェイ11号線をご利用いただきまして……』

ほら、もう終点だ。車内が少しずわついてきた。乗客はそれぞれ、網棚から荷物を下りしてドア前に並んでいく。あたしたちも降りる準備と……。

階段を上つて地上へ出ると、まず最初にあたしたちの目に留まつたのは、建設中の東京スカイツリーだった。

2-C プラム～もえぎ野の街～（前書き）

番外編として、プラム第一弾、「もえぎ野の街」についてです。
紗樹たちの住む街は、一体どんなふうになっているのでしょうか。
？

2-C パラム～もえぎ野の街～

1 もえぎ野駅

西南急行電鉄・林間都市線の終点。始点の渋谷とは、急行なら最速30分で結ばれる。ニユータウンにただ一つの駅であり、ニユータウン中から路線バスが集結する。朝は通勤・通学客でにぎわう。

2 もえぎ野東小学校

ニユータウンで最も新しい学校。25年前、駅東側の開発に伴つて開校した。駅から徒歩10分。雑木林のそばにある。

1学年は3クラスで、全児童数およそ630人。鉄筋4階建ての教室校舎と、2階建ての特別教室（音楽室・理科室など）が集まる校舎、それに体育館がある。

3 紗樹の家

駅から線路沿いを西（渋谷方面）へ7分ほど歩いたところにあるベージュ色の、よく一般的な一戸建て。踏切がそばにあり、その音が常に聞こえてくるのがちょっととした悩み。

4 倖也の家

6年3組遠足5班の中で、駅から最も遠いところにある。駅から歩いて20分、バスなら通常10分。洋式ながらも、積極的に「和」のデザインを取り入れた造りになっている。

とうあえず今回まではここまで！これからもひと他の施設なんかも出てくる予定です。とこつか出します！徐々に町が造られていくので、本編のほうでもそこに注目してみてください。

先生の合図で、貸切の大型バスが動き出した。バスガイドは、居ない。まあ乗つてる時間が短いからなんだろうけど。

「あ、電車でお疲れで寝ちゃつてるような人もいますね。すぐに浅草寺に着きますから先生の話をちゃんと聞いてくださいね。」

バスガイドの位置に居るのは、2組担任の秋田先生。よく「あきた先生」と呼ばれてしまつけど、『秋田』と書いて、『あいだ』と読むらしい（ちなみに生まれは山梨県で、秋田県とは何の関係もない）。40そこそここのオバサンだが、バスガイド『気分ノリノリ』だ。

「えー、右手に見えますのは……って、こんなことやつてる場合じゃないので、バスの中に置いていてください。どうしてもトイレに行きたかった。はい、皆さんはまず雷門を通つて浅草寺に行きます。そこで大体20分見学して、またバスに戻つてきます。荷物は要らないので、バスの中に置いていてください。どうしてもトイレに行きたいという人は、浅草寺に着いたらすぐ先生に言つください。みんなで一緒に行きますから。バスを降りたらすぐにクラスごとに整列して、見学します。」

まだ荷物の整理をしている人がいて、車内はざわざわとしていた。それでも先生はお構いなしに説明を続ける。

「各班の班長はクラスごとに整列したあと、それぞれ担任の先生に報告するつているのは分かつてるよね。あ、そうそう、自分がどっちのバスに乗つたか、一応覚えておいてね。」

この遠足の引率の先生は7名だ。

まず、1組担任の平木先生。さつきあたしたちも会つたけど、行きと帰りにもえぎ野駅でのチェックを担当している。だから、東京にはみんなより一足遅く到着して、ひと足早く帰ることになる。平木先生は浅草寺で合流の予定だ。

2組担任の秋田先生は、今、バス1号車に乗つて、色々としゃべつていて。バスは大型を2台使つていて、それに3クラス24班が

分乗する。班ごとならばどちらのバスに乗ってもいいことになつてゐるので、クラスはばらばらだ。

3組担任（あしたたちの担任）の輿石先生は今日ずっと会つてない。学年で一番若く、30歳の男の先生だ。噂では他の一人の先生に尻に敷かれているらしい。つと、そんなことはどうでもいいんだけど、輿石先生はバス2号車に乗つていて、1号車後部の窓から後ろを見ると、すぐ後ろに2号車がついていて、輿石先生の背中が見える。

それと、べにばな級の渡辺先生が2号車に乗つていて、べにばな級というのは東小の知的障害者学級のことで、6年生で一人、その学級に行つているから、渡辺先生はその子の付き添いだ。余談だが、べにばな級という名前は、これを立ち上げた時、初めてここに担当になつた先生がつけたらしい。その先生は山形県の出身で、故郷を想つてつけたとか（べにばなは山形県の花だそうで。）。

最後に、教務主任の新田先生と、保健室の小野先生。2人はなんかあつた時にすぐに行動できるよう、新田先生の愛車で移動している。

以上7名の先生が協力して、この遠足をサポートしている。あくまで遠足の主役は児童なんだという考え方だ。

あたしの班では、トイレに行つたのは葉月だけで、あたしを含めて他三人は先に並んで待つていた。ふと1組のほうを見てみると、新田先生が前に立つて並ばせていた。平木先生はまだ到着していないようだ。

トイレに行つた人たちが戻つて来るには、思ったより時間がかかつた。葉月は、駆けてくると道路の向こう側を指差して、

「あれ、平木先生じゃない？」

と言つてきた。そちらを見ると、地下鉄の駅の出口から出でてきて、信号待ちをしている平木先生の姿があつた。

「ここまで地下鉄で来たんだね。」

佐島は相変わらずぼーっとした表情で言つた。

それから浅草寺を見て、2週間前に見学地に追加された両国にある江戸東京博物館に行って、そこで弁当を食べ、上野公園は行かずに国会議事堂へ直行した。

国会議事堂は、テレビで見るよりもずっと堂々と構えていて、圧倒される感じだった。こんなところで大人げない罵声が飛び交うなんて信じられないと、この国の政治を憂う紗樹だった。

2 - ?

もう一人は神原弥生（前書き）

ここからこよいよ遠足の話の山場です。

なんてことはなく、閑散としたホームにはいつも通りの放送が流れた。

「紗樹、紗樹！」

偉也が耳元で叫んでいる。

「なにぼーつとしてたの？」

「あつ、あつ、あわわわわ！」

そうか、あたしは気持ちがどっかへ行つてしまつていた。

『まもなく、1番線に、有楽町方面・新木場行きが参ります。危ないですから、白線の内側にお下がりください。』

あたしたち以外誰もいない長いホームに、電車の接近アナウンスが響き渡る。放送が終わると、すぐに強い風が吹き始めた。その風はどんどん強くなつてきて、あたしたちは思わずホームの内側のほうへ下がつた。と、同時に、轟音を立てて電車がホームへ入つてきた。すると風はやんで、電車のモーターの音だけが聞こえるようになつた。電車が狭いトンネルの中を走つてきたから、その圧力で風が吹いてきたのか。

扉が開いて乗ろうとすると、前のほうのドアからも乗ろうとしている人がいることに気付いた。今まで柱か何かに遮られていて見えなかつたのだろう。

結局、桜田門から乗つたのはあたしたちともう一人で、合計5人だつた。

車内もそれなりに空いていて、あたしたちもゆつたりと座ることができた。

「あのさあ」

佐島が、「聞いても聞かなくともいいよ。」といふうに話を切り出した。だからこそ内容が気になる。

「 「 「え？」 「 」

「セツキ桜田門」でおんなじ電車に乗った人が居るじゃん？ あれで、神原のお母さんに見えたんだけど。」

さすがにこの言葉は3人に衝撃を与えた。

「 「 「はあ？」 「 」

「遠くから見たからははつきりとは言えないけど、90%神原のお母さんだと思つ。」

90%って、もうほんとんど断言してるようなもんじゃん！

「なんで、そう思つたの？」

葉月が恐る恐る訊く。

「電車待つてる時からちらちら見えてるような気はしてたんだよ。っていうか、視線を感じたからさつと振り向いたら、向こうもさつと隠れただよ。ってことは、俺たちのことを狙つててことじやん。」

「狙つてる？」

偉也が信じられないという顔をする。

「ああ、狙つてるっていつたら大げさだけど、いつのことを分かつてる人だと思つよ。」

「なんでそんなことするの？」

あたしも信じられない。

「うーん、こんなこと言つたらちょっと失礼かもしれないけど」

佐島はちらりと葉月のほうを見た。葉月は力強く頷いた。

「ま、知つての通り、あの人ちょっとおかしいじやん。やつてることが。でさ、中野のお母さんってPTA広報委員やってるでしょ？」

「あ、うん。」

「なんでここであたしのお母さんが出てきたんだ？」

「となれば、当然面識はある。中野のお母さん、なんか神原弥生の気に障るようなことしたんじゃない？ それで、嫌がらせつていたら変かな。とにかく中野のお母さんの責任を追及するネタがほしいって、中野に何か失敗させたい。中野が失敗すれば、場合によつて

は親が責任を追及される。で、中野は班長。だから責任もある。とすると、狙われてるのはこの班全員じゃないかって思う。」

佐島は一気にまくし立てた。

4人の間に一瞬沈黙が訪れる。ふと車内放送が聞こえてきた。

『まもなく、銀座一丁目、銀座一丁目です。』

「あつ、降りなきや。」

真つ先に気付いたのは偉也だった。

「いや、もう少し様子を見てみよう。もしかしたらここで神原弥生が降りてしまうかもしない。そうすれば、もう追ってはこないだろう。」

「じゃあ、あたしたちは次の駅で降りて、戻りの電車に乗るの？」
「そうしたほうがいい。」

電車は銀座一丁目の駅に着いた。なんとなく不安な気持ちになりながらも、4人はじつと席に座つていた。

すぐにブザーが鳴つて、車掌はドアを閉めた。

「これで、神原弥生が降りていくかどうかだね。」

「もし、降りてなかつたら？」

あたしはまた心配になつてきた。

「ばれないようにさつさと駅から出る用意はしておいたほうがいい。」

『まもなく、新富町、新富町です。』

すぐに次の駅に着いた。電車から降り、反対側のホームに向かつた。新富町駅は、ホームが2本あってそこに二つの線路が挟まつている造りになつていたので、反対側のホームに行くには一度階段を上がらなければいけない。ちょっと不便。まあ、普通はそんなことする人いないんだけど。

階段を上りきつたところで、足の付け根に妙な感触を覚えた。ポケットに手を突っ込むと、学校から渡された携帯電話がバイブレー ションで震えていた。

「あ、ちょっとみんな待つて。」

たぶん先生からだろ？ まさか、神原弥生が掛けてきて、「私にはあなたたちが見えてるのよ。なぜ新富町に居るの？」と聞いたらはするまい。

「はい、お待たせいたしました。6年3組5班、班長の中野です。」

おお、ばっちり。実用マナー・電話の受け答え。

「なによその受け答え。あ、平木ですけど。」

なぜか担任ではなく、平木先生からだつた。

「はい、なんですか？」

「あなたたち、今どこに居ますか？」

「あ、え、えつと」

「なんでそんなこと聞くんだ！」

「あ、銀座一丁目の駅を降りたところですが。」

あたしは、なんとか取り繕つて答えたが、相手に嘘は見え見えのようだ。

「え？ 嘘は分かるのよ？」

平木先生は、怒っているよ？ ではなかつたが、ちょっと追及するような口調になつていた。

「その携帯にはGPSがついてるから、あなたたちがどこにいるかはばればれなのよ。」

「はい」「めんなさい。新富町に居ます。」

もつすぐ戻りの電車が来ると佐島がサインを送つてきたので、あたしは早めに切り上げようとした。

「どうして？」

「えつと、銀座一丁目で降り損ねちゃつたんですよ。」

「あら、おしゃべりに夢中になつてたの？」

平木先生はなかなか放してくれない。

「あ、まあ、そんなんところです。」

あたしは徐々に早口になつていつた。

「あれえ、それでいいんだっけ。特に地下鉄でどっかへ出かける班は先生のところから遠く離れるんだから、そういうのには極力注意しないといけないって奥石先生から言わされてないの？」

「あ、はい、ごめんなさい。言われてます。」

「『あ、じゃないの。そういうことをしてたら、次の6年生が遠足でこういう行動ができなくなつちゃうの。それをきちんと心に留めておいてほしいと思います。』

「はい！『じめんなさい。』

「それから」

その後もなぜか、長つたらしい説教が続いて、その次に来た電車にもタッチの差で乗れなかつた。

「まつたくなんなんだよ！」

偉也は憤慨していた。

「ただでさえ一駅余計に乗つて時間がないつていうのに、なんでもんなに長く電話に引きとめとくんだよ！」

「それはたぶん」

佐島は落ち着いていた。

「たぶん、時間稼ぎだ。銀座に何か仕掛けるための。」

「えつ？」

葉月が声を上げた。あたしはふと顔を上げる。

「銀座について、……じゃあまさか、平木先生が神原弥生とグルだつていうの？」

「もちろん、確証はないけど。あつ、そつだ。電話で話したことくわしく話して。」

反対側のホームに降り立つと、あたしは足に振動を感じたといつから思い出した。

「まず、電話に出て、あたしが、

『はい、お待たせいたしました。6年3組5班、班長の中野です。』

つて言つたんだよ。」「何それ？」

偉也が呆れている。

「そしたら、そう、平木先生も偉也みたいに

『何それ

みたいなこと言つて、

『あなたたち、今どこに居るの?』

つて聞いてきた。それで、

『銀座一丁目』

つて答えたら、

『その携帯にはGPSがついてるから嘘はつけない』

つて言つてきて、あたしが白状したら、

『次の6年生が遠足で自由行動ができなくなる』

つて

さつきまで「うん、うん」と頷いて聞いていた佐島は、一人で何か

考えている。

「あのさあ、

『GPSがついてるから場所は『まかせない』

つていうことを言つたかったんだよね。平木先生は。

「そうだよ。」

「でもさあ、」

「いいや、電車に乗つてから話そ。」

あたしはそう言つと、風になびく髪をおさえた。

また、あの風が吹き始めた。

「いいや、電車に乗つてから話そ。」

『まもなく、2番線に、池袋方面・和光市行きが参ります。危ないですから、白線の内側にお下がりください。』

「えつ！」

佐島は慎重に言葉を選び出しているようだつた。

「今いるのつて、地下だろ？ 聞いたことがあるんだけどさ、GPSの電波つて、地下に入っちゃうと届きにくいくらいじゃなかつたけ。

「えつ！」

『まもなく、2番線に、池袋方面・和光市行きが参ります。危ないですから、白線の内側にお下がりください。』

また、あの風が吹き始めた。

「やつらの話の続きだけだ。」

座席に腰を落ち着けると佐島が話し始めた。

「G P Sっていうのは、俺にも詳しいことは分かんないけど、人工衛星から飛ばした電波で位置を特定する仕組みになってるらしい。それで、その電波っていうのが、地下に入っちゃうとうまく届かないんだよ。」

「つてことは！」

偉也が勢い込んでいた。

「神原弥生が銀座一丁目で降りて、俺たちが降りてこないことを不審に思い、平木先生に連絡して、平木先生が紗樹に電話を掛けてきた。つてこと？」

「たぶんね。理由は分からぬけど、神原弥生と平木育代はグルだよ。つてことは、平木から神原に連絡が行ってるかもしれない。だから、銀座一丁目で降りたら、神原弥生と接触しないようにしないといけないんだよ。」

このことを一番よく分かってるのは、葉月だった。

「でも、お母さんたぶん出口で待ってるよ。そしたらひそり逃げるなんて無理じゃない？」

「神原は　ああ、ややこしいから葉月は、お母さんに警察博物館に行くって言つてある？」

佐島はすっかり本気モードだ。

「うん。8号線で銀座一丁目まで行って、そこから歩くとまで言つてある。」

「あ、そうだ。地下鉄の駅つて、普通いくつも出口があるから、神原弥生が待ち伏せするとすれば、警察博物館に近い出口のはずだから、それと真逆の出口から出れば、なんとか会わずに行けると思つけど。」

あたしは、肩掛けバッグからインターネットでプリントアウトした銀座一丁目駅の構内図を取り出した。と、そこでかくんとひと揺れあり、電車が停まつた。地下鉄は駅間が短いから、落ち着いて話もできない。

『銀座一丁目、銀座一丁目です。2番線の電車は、池袋方面、和光市行きです。』

あたしたちは慌てて降りた。あたしはホームのベンチに腰かけ、みんなが構内図を取り囲んだ。

電車が発車して、急にホームが静かになった。

「警察博物館に行くのがこっちの7番出口だから、その反対側つていうと9番出口かな？」

「行こう！ もう予定より10分も過ぎてる。」

意外にも、真っ先に駆けだしたのは葉月だつた。遅れた原因が自分の母だということに多少なりとも責任を感じているらしい。

今あたしたちが居た池袋方面行きのホーム（2番線）は、地下4階で、駅の一番深い部分にある。同じ階に新木場方面行きのホームがあるのかと思つたら、新木場方面の1番線は地下3階にあつた。同じ線なのに階が違うというのはなんとなく不思議だ。どうやら、『地下だからなんでもあり』というわけにはいかないらしい。

改札を抜け、階段を上ると地上の光が見えてきた。それほどまぶしいというわけではないが、なんとなくホッとする。

あたしは、地下鉄が好きなほうだ。その『車両』とか、『駅』とかではなく、その空間そのものに魅力を感じる。普段なかなか乗る機会がないからかもしれない。

魅力的だとしても、やはり太陽の明かりを感じるとホッとする。

が、今はホッとしている場合ではない。あたしたちは神原弥生の目に留まらぬように無事警察博物館へ辿り着かなければならない。

あたしたちはとりあえず、銀座のメインストリートである中央通りを日本橋のほうに向かつて歩き出した。9番出口は、日本橋に向かつて右側の歩道につながつている。

日本橋方面に50mほど行くと『銀座一丁目』の交差点があり、それを超えてもう50mほど行ったところの道路の反対側が7番出口だ。そこを気取られないよう歩くのがポイントになってくる。あたしたちは一瞬お互いの顔を見合わせ、それとなく雑談しながら、それでも神経は尖らせて中央通りを北東に向かった。雑談はあくまで見せかけなので、話がとんちんかんになつていて、よく、「話をやめて！」と先生が言つてもみんななかなか静かにならないのに、「適当におしゃべりでもして」と言わると、今度は逆になかなか話題が見つからない。それと同じで、みんな無理に話題を作りだそうとしているから、お互い話しがかみ合つていないので、「ねえ、さつきの地下鉄の中でマルコメが居たよね」

「そうそう、お坊さんが弟子を連れて」「神父さんが亡くなつたらしいよ」

「ところどころでこないだうちに変な宗教が来て」「玄関の前でサークスみたいなショーをやつてみせて」「聖書を焼き払っちゃつたよ」「それに怒つた神父さんが」「どこからともなく乗り出して」「炎の中に飛び込んで」「大変な大やけど」「救急車に乗せられて」「病院行つて即死亡。チーン。」

「　　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、アーメン」

信号が赤になつた。足を止めてはたと氣付く。話がかみ合つてないんじやなくつて

みんな大真面目にすごく不謹慎な話をしてた……。

レジリエンスの強化に向けた取り組み。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014p/>

Parent-Teacher Association

2011年1月26日09時24分発行